

第七回 図書館史研究会 ニュースレター

第三回 運営委員会報告

1983年6月20日(月)午後6時より、立教大学セントポール会館にて、第三回運営委員会を開催。出席は、鮎沢(JLA)、石井(東洋大)、小川(法政大)、河井(立教大)、阪田(ICU)、寺田(情報大)、常盤(独協大)、中林(国会)、藤野(情報大)、川崎(椙山女学園大)。

夏期セミナーと冬期大会について検討した。

- (1) 本年度の大会・総会 : 12月4日(日)に京阪神で開くことに決定した。詳細については、東京の大会検討委員会(小川、河井、阪田、中林)と関西の大会実行委員会で検討する。

実行委員会の構成は以下。

実行委員長 : 森 耕一(京大)

実行委員 : 竹島昭雄, 向井克明, 山中容子  
(以上、神戸市立図書館),  
豊後レイコ(大阪アメリカンセンター),  
後藤昌弘(阪南大図書館), 佐藤毅彦  
(京大大学院), 川崎良孝(事務局)その他

- (2) 会 勢 : 1983年6月20日現在98名

- (3) 次回運営委員会 : 9月5日(月) 名古屋桜華会館

## 図書館史を考えるセミナー（第一回）の御案内

「図書館史研究の充実した討論と発表の場」を求めて、昨年12月、私たちは図書館史研究会を結成しました。研究会ではこの趣旨にもとづき、来たる9月4日、5日の両日、第一回の「図書館史を考えるセミナー」を、下記の要項で開催いたします。

私たちは、今回のセミナーを通して、今日の図書館史研究の現状（到達点と問題点）を明らかにし、それを土台として図書館史研究の発展方向を見定めていく確かな一歩を踏み出したいと考えています。セミナーが実り多いものとなるよう、多くの方々の参加を呼びかけるものです。

セミナー実行委員会

### 記

テーマ： 図書館史研究の現状と展望

日時： 1983年9月4日（日）－5日（月）

会場： 名古屋市内 桜華会館（蘭の間・本館2階）

〒460 名古屋市中区三の丸1-7-2

定員： 先着35名

費用： 参加費 3,000円（但し、学生は1,500円）

夕食・懇親会費 5,500円

宿泊費 3,300円

5日の昼食 1,200円

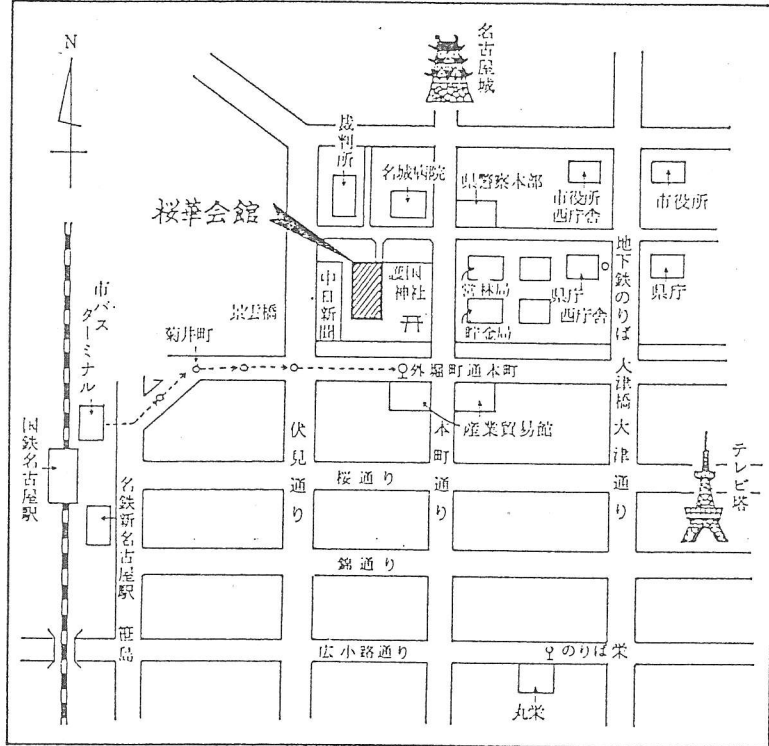
（例えば、4日のプログラムに参加し、宿泊しない場合は、参加費3,000円と懇親会費5,500円。計8,500円になります。）

申込方法： 同封の振替用紙に必要事項を記入し、8月13日（厳守）までにお申し込み下さい。

※ 出張扱い等のため、公式の文書が必要な方は研究会事務局まで御連絡下さい。

※ 参加申込の確認は、申込金の受領はがきの発送でおこないます。

## 桜華会館案内図



## 経路ご案内

### (市バス)

名古屋駅から

市バスターミナルの①番のりばにて(143)号系統上飯田町行に乗車、外堀町通本町にて下車、北へ約100米(愛知県護国神社西隣)

栄から

市バスターミナルの⑥番のりばにて(8)号系統安井町西(又は江向)行に乗車、外堀町通本町にて下車、北へ約100米(愛知県護国神社西隣)

### (地下鉄)

市役所下車、南出口西へ約500米(愛知県護国神社西隣)

プ ロ グ ラ ム  
~~~~~

9月4日(日)

12:00~12:30 受 付

12:30~12:50 開会あいさつ

12:50~16:00 日本図書館史研究

報告Ⅰ(45分) 「形成期日本公共図書館の種々な様相」

永 末 十四雄(北九州市立図書館)

報告Ⅱ(45分) 「戦後公共図書館実践史—『中小レポート』発刊20周年の意義をふまえて」

石 井 敦(東洋大学)

討 論(100分) 司 会 : 加 藤 三 郎(名古屋市立図書館)

16:00~16:15 休 憩

16:15~17:45 講演「開かれた大学を越えて—コミュニティカレッジの課題」

宮 城 悦 郎(神戸山手短大助教授)

司 会 : 川 崎 良 孝(椋山女学園大学)

17:45~18:30 連 絡・休 憩

18:30~20:00 夕 食(懇親会を兼ねる)

9月5日(月)

8:00~9:00 朝食

9:00~11:30 イギリス図書館史研究

報告Ⅰ(45分) 「イギリス公共図書館史研究の現状」

常盤 繁(独協大)

報告Ⅱ(45分) 「19世紀イギリス公立図書館史研究」(邦文文献の検討)

森 耕一(京都大学)

討論(60分) 司会: 河井弘志(立教大学)

11:30~12:30 昼食

12:30~15:00 アメリカ図書館史研究

報告Ⅰ(45分) 「アメリカにおける大学図書館史研究の動向」

三浦逸雄(東京大学)

報告Ⅱ(45分) 「戦後アメリカにおける大学図書館の協力について」

菊池しづ子(学習院女子短大)

討論(60分) 司会: 川崎良孝(椋山女学園大学)

15:00~15:30 休憩

15:30~16:30 全体討論・まとめ

司会: 小川 徹(法政大学)

中林隆明(国立国会図書館)

まとめ: 藤野幸雄(図書館情報大学)

16:30~16:50 連絡

閉会あいさつ

講演：「開かれた大学を越えて：コミュニティ・カレッジの課題」

神戸山手女子短期大学助教授 宮城悦郎

1950～60年代にかけてアメリカの短期大学が自らをコミュニティ・カレッジ (Community college) と称するようになったのは、その教育理念に関連して画期的な変革が行われたという事情によるものです。つまり、アメリカの短期大学が、従来の入学資格に該当するコミュニティの一部の成員だけでなく、そのすべての成員に奉仕することを自己の存在理由としたからです。このような教育理念の大変革をもたらした根本的要因をあげるとすれば、それは当時の公民権運動が投げかけた波紋をみてもわかるように、コミュニティの抱えている問題についての人々の関心が深まったこと、またそれらの問題を解決しようとする気運が高まったためであるといえます。

オープン・ドア・アドミッション・ポリシーズ (open door admission policies = 志願者全員入学許可の方針) は、まさにそうした社会的要請に呼応してとられた大学の入学許可に関する方針であったのです。しかし、理念がいかに優れていても、それが実際に機能するかどうかということになりますと、それはまったく別個の問題になります。このことはコミュニティ・カレッジの問題にそのままあてはまることです。オープン・ドア・アドミッション・ポリシーズの実施に伴い、大半のコミュニティ・カレッジは矯正教育のプログラム (remedial program) を導入しました。ところが、

ごく最近になるまでそのようなプログラムが「新しいタイプの学生」の真の必要性に応えうるかどうかということは、実証的な意味においてほとんど問題にされませんでした。

今日、ようやく矯正モデル(remedial model)の限界を知ったコミュニティ・カレッジの指導者達は、オープン・ドア・アドミッション・ポリシーズの実現する方法論的手段として発達モデル(developmental model)の開発に向かって努力していますが、それは矯正モデルが新しいお客を大学へ連れてくることには成功したものの、かれらから多様な能力を引き出すまでには到らなかったからです。コミュニティ・カレッジのこうした発展経過を見ますと、その発展の原動力となっていた問題意識は、アメリカの公共図書館における“outreach”の方針を生み出した問題意識と軌をいつにしていることは明白でありましょう。つまり、恵まれない人々に対するサービスをどうするかということは、コミュニティ・カレッジ・公共図書館の双方に共通する問題であるからです。

そこで私は“disadvantaged”とは誰のことか、何を基準として“disadvantaged”とみなすか、かれらをして積極的に学習にとり組ませる方法は?といった、コミュニティ・カレッジの研究と図書館学の双方に共通する問題をとりあげながら、アメリカの短期大学の現状について述べたいと思います。

#### 宮城悦郎氏略歴

神戸大学教育学部卒業

大阪大学大学院研究生を経て、ミシガン州立大学大学院修士課程卒業

専攻：教育学